

James W. McGuire,

*Peronism without Perón:
Unions, Parties, and De-
mocracy in Argentina.*

Stanford: Stanford University Press, 1997,
xvii + 388 pp.

まつ した ひろし
松 下 洋

はじめに

1980年代にラテンアメリカ諸国が相次いで民主化を遂げ、しかもそれが長期化していったことは、この地域の政治体制を権威主義と見なしてきた従来の研究に大きな修正を迫り、研究者を困惑させた。この困惑は今日なお継続しているといつてよいが、その一方で、民主化の進展に伴い、以前は研究対象とされることの少なかった政党や政党システムなどに関する制度論的研究が次第に増加しつつある^(注1)。アルゼンチンのペロニスタ党（ここでは運動をペロニズム、政党をペロニスタ党と呼ぶことにする）における制度化の立ち遅れと民主主義との関係を主題にした本書も、そうした制度論的研究の一例といえよう。また、最近の制度論は、合理的選択理論と結びつく場合が少なくないが、本書でも合理的選択理論が土台となっている。

合理的選択理論は、従来ラテンアメリカ研究では利用されることの少なかったものだが^(注2)、軍政時代のラテンアメリカを説明する際に大いにもてはやされた地域の個性を重視する政治文化論、従属論、官僚主義的権威主義論などに代わって、政治的事象の説明にリーダーの選択を重視する立場である。もちろん、文化的・伝統的制約を完全に無視するわけではないが、本書の著者も言うように「政治的選択が重要だ」(Preface, p. vii)というのがその基本的ス

タンスなのである。

普遍主義的立場に立つこうした理論が台頭した背景に、冷戦の終結や民主主義のグローバルな拡大などに伴う、価値観の普遍化があったとすれば^(注3)、本書は民主化という大変動に少なからず触発された視座と方法論によってペロニズムに切り込んだ著作といえよう。なお、著者マクガイアは、米国の研究者で1989年に本書のメインタイトルと同題の論文^(注4)でカリフォルニア大学から博士号を取得し、現在は、ウェスレヤン大学准教授である。本書は博士論文を手直しして、そこに1990年代の動向を加筆したものである。

I 本書の構成

本書は、次の9章からなっている。

- 第1章 ペロニズム、政党の制度化、民主主義
- 第2章 ペロン登場前の諸セクター・エリートと政党
- 第3章 ペロニズムとその遺産
- 第4章 ペロニズム、政治活動の禁止、アウグスト・バンドールの登場
- 第5章 バンドール対ペロン
- 第6章 革命、復活、弾圧
- 第7章 革新的ペロニズムの勃興と退潮
- 第8章 自由市場型改革と政治的戯画化
- 第9章 分配闘争、政党の制度化、民主主義

以下、章別にその内容を述べる。第1章では、政党の制度化を中心に本書の理論的枠組が明示される。第2章では、ペロニズム形成前のアルゼンチンにおいて、階級と政党との関係が希薄だったこと、とくに、地主層と労働者が利益を表出する政党を欠いていたことが明らかにされる。第3章では、ペロンが労働運動と結びついてペロニズムを形成し、さらに1947年のペロニスタ党の結党後カリスマ的指導体制を確立していった過程が分析される。第4章から第5章にかけては、ペロニスタ党を個人支配から脱却させること（「ペロンなきペロニズム」）により制度化を図った金属労組の指導者バンドール (Augusto

Vandor)とそれを阻止しようとしたペロンとの角逐が論じられ、ペロンの勝利により党の制度化が挫折したとされる。第6章では、1966年から83年に至る軍政とその狭間の73~76年に存続したペロニスタ政権が分析され、73年に大統領に返り咲いたペロン自らが党の制度化を試みるが、翌年急逝したことで不首尾に終わったことが指摘される。第7章では、1983年にはじまる民政移管期にペロニズム内部では、革新派ペロニズムのカフィエロ (Antonio Cafiero) による党の制度化が試みられるが、党内抗争においてカリスマ性をもつメネム (Carlos Saúl Menem) に敗れ、制度化はまたしても日の目を見なかったとしている。第8章では、メネム大統領が、軍部の政治介入の可能性を著しく低めたことを評価しつつも、彼の恣意的支配や腐敗を厳しく批判している。第9章では、本書の分析枠組と従来の分析方法との違いが比較され、アルゼンチンの民主化が進展するにはペロニスタ党のなかで組織本位の勢力が勝利することが必要なことを説いて本書を結んでいる。

以上の概括からも明らかなように、本書は政党の制度化を軸に据えてアルゼンチンのペロニスタ党の誕生から今日に至るまでの歩みを分析したものである。では、政党の制度化とは一体何を意味するのであろうか。

II 政党の制度化とは

本書のキーワードである「政党の制度化」という概念は、著者によれば、少なからず1960年代にハンチントン (Samuel P. Huntington) が発表した著作からヒントを得ているという。当時のハンチントンの主張は、ごく単純化していえば、途上国において社会的動員が進む一方で政治の制度化が遅れると政治的不安定に陥りやすいというものであった。著者はこの命題のなかで「政治の制度化」を「政党の制度化」に置き換え、「政党の制度化」の遅れによって生じる帰結は政治の「安定性」ではなくむしろ「民主主義」に関わるとする。つまり、社会的動員が進行し、その一方で政党の制度化が進まなければ、民主主義は確立されないと考える (pp. 271-272)。言

い換えれば、社会的葛藤の激しい社会では、政党の制度化が民主主義の確立にとって不可欠だというのである。このように、政党の制度化を社会的葛藤と結びつけていることから、自らのアプローチを「分配闘争—政党制度化アプローチ」とも呼んでいる。

このように、政党の制度化を民主主義の要件として重視している点が本書の特色のひとつだが、さらに制度化の要件として、政党が価値観を有することを挙げている点も際立った特色といえよう。すなわち、著者は政党の強さとして、(1)選挙における集票能力、(2)政党に対する党員の情緒的支持(党に対する党員の精神的コミットメント)、(3)組織力(党員の動員力)、(4)代表能力(激しい社会的亀裂を現存の制度内で処理できる能力)、を挙げ、政党の制度化は、主として(2)に関わるとする (p. 10)。また、著者は、(2)の不足が(4)の代表能力に影響を与えるとして、(2)と(4)の立ち遅れが民主主義の定着に悪影響を与えるとしている (p. 11)。要するに、ペロニスタ党における制度化の立ち遅れとは、党員の支持が党ではなく、ペロンや特定のリーダーに向けられ、党が明確なイデオロギーを欠いていたこと、党員が議会制度の枠外で利益の表出を図りがちなこと、を意味するといえよう。

こうした「政党の制度化」という発想は、評者にはペロニスタ党を分析するにはすこぶる有効な概念に思われた。というのは、アルゼンチンが抱える政治問題のひとつは、一部のラテンアメリカ諸国に見られるような強力な政党の欠如ではなく、逆に選挙で強すぎるペロニスタ党が、議会制度に対する適応性を欠いていたことにあったと考えられるからである。そうしたペロニスタ党の特色を浮き彫りにしたいがゆえに、著者が独特の制度論を提示したのでないか、と思えるほどである。

では、ペロニスタ党における制度化の遅れがなぜ生じ、それが今日まで尾を引いているのはなぜなのか。この点を明らかにするために、本書では、1940年代の党の生成時から最近に至るまでの約半世紀のペロニスタ党の歩みを丹念に検討しているが、ここでは、紙幅の関係で、生成期から政権担当第1期 (1943~55年)、野党第1期 (55~73年)、民政移管

後(83年～)の3つの時期に限って検討することにした。

III 制度化を挫折させた3つの時期

ペロニズムは、1943年6月4日の軍事クーデターを機に、軍事政府の労働関係の要職に就いたペロンが親労働者的政策を次々と打ち出し、労働者から熱狂的な支持を得たことを嚆矢とする。1945年にはペロンを支持する労働運動の指導者が中心となって労働党が結成され、この党を母体に46年の大統領選で当選を果たしたペロンは、46年に労働党をはじめとする支持政党を糾合して単一革命党を創設し、翌年党名を変更してペロニスタ党が誕生した。

このような経緯をたどった生成期のペロニズムに関しては、その支持者が農村から都市に移動して間もない新労働者だったのか、あるいは、旧来の労働者だったのかという問題が、ペロニズムの性格規定と絡んで激しい論争を呼んできたのだった^(注5)。この点について本書では旧来の労働者の支持を重視する説をとっているが、論争に深入りするのを避け、むしろなぜペロンが労働者の支持の方向を党ではなく、自分自身に向けさせ、カリスマ的支配を樹立しえたのかに議論の重点を置いている。言うまでもなく、このことが著者のいう制度化の挫折に他ならないからである。

そして、著者は、ペロンが党の制度化を回避し、党内で個人的支配を確立しえた理由を、ペロン・労働者・党の三者の関係を分析を通して明らかにしており、そこでは、労働者や彼を支援した政治家が政党運動に関して経験不足だったことなどと並んでペロンのさまざまな政策が功を奏したことが要因として強調されている。たとえば、国有化政策に伴う大量の国家公務員の創出や国家による労使関係の決定といった政策が、議会(党)よりも政府(ペロン)に依存的な労働運動を生み出していたことや、党内にライバルの出現するのを恐れたことから、彼が党の組織化に消極的だったことなどである。このように、彼の実施した政策を重視する点に、すでに触れた合理的選択理論の影響を見て取れるが、ただ、政

策を重視しつつも、こうした政策を通して、ペロンが何を目指したか、アルゼンチンを如何なる国家にしようとしたのかについては明らかにされていない。

また、民主主義との関連では、ペロンが行った厳しい弾圧もあまり取り上げられていない。評者は、今後アルゼンチンで民主主義が定着するには、軍政時代の人権抑圧だけでなく、程度の差こそあれ1946～55年にペロンが実施した抑圧も、負の遺産として批判されなければならないと考えるのだが^(注6)、そうした観点からすると、ペロンのカリスマ的支配の確立に議論を限った本書の記述では、初期ペロニズムがアルゼンチンの民主主義に対してもった負の意義を十分検討したことにはならないように思うのである。

次に野党第1期(1955～73年)について見てみよう。この時期には、ペロニスタ党の制度化が「ペロンなきペロニズム」として具体化し、そのリーダーだったバンドールと彼を蹴落とそうとしたペロンとの間の角逐が克明に描かれている。アルゼンチンの政治史に関する著作のなかで、両者の対立をこれほどまでに詳細に論じたものは、管見のかぎりでは今までなかったし、本書のなかで最も精彩を放っている部分といえよう。この対立は1966年4月のメンドサ州知事選において、3位となったバンドール派の候補者が2位のペロン派の候補者よりもはるかに少ない得票だったことで事実上終わるが、著者はこの時のバンドール派の敗北が66年6月の軍事クーデターの誘因となったとする興味深い説を打ち出している。興味深いというのは、従来は1965年3月頃から軍内部ではクーデターの意向が固まっていたとする見方が一般的だったからである。著者はこの選挙におけるバンドール派の敗北が、軍にペロニズム内部における穏健派の敗北を印象づけ、ペロニズムとの妥協の道がないことを認識させ、結果的にクーデターの重要な引き金になったとする。多くの資料に裏づけられた議論であり、評者には説得力のある説のように思われた。

ここで取り上げる第3期は、1983年の民政移管にはじまるが、政党活動が全面的に自由化されるなかで、83年の選挙でペロニスタ党が敗北したことは、

党内における労働側の影響力を低下させた。こうした新しい状況は、ペロニズム革新派のカフィエロらによる党の制度化を可能にするかに思えたのだった。ところが、カフィエロは1988年7月、党大会における大統領候補の指名をめぐる、カリスマ的人気を得ていた対抗馬のメネムの前に敗れてしまった。著者はこの時のカフィエロの敗北を1966年4月のメンドサの州知事選におけるバンドール派の敗北になぞらえ、「カリスマが組織を制した」(pp. 210-211)としている。

著者はメネムの勝因として、1980年代の労働運動についての詳細な研究を通して、4つの代表的な労働中央組織のひとつだった「15グループ」がメネム支持に回ったこと、メネムが革新派から離脱した巧みな戦略の成功などを挙げている。また、メネムの個人的魅力なども挙げているが、評者はカフィエロに対するメネムの勝利の分析には、政治文化的説明をもっと重視すべきではないかと考えている。つまりメネムに代表された保守的、内陸的政治文化とカフィエロに代表された都市型、近代的政治文化の対立であり、まだペロニズム内部では前者が依然有力だったように思えるのである。そうであるからこそ、メネムの脱ポピュリズム的で反労働的な諸政策にもかかわらず、物価の安定という成果を引っさげてメネムが1995年の大統領選でも勝利を収め得たのではあるまいか。著書は政治文化論の意義を必ずしも否定しているわけではなく、随所でそれを使った説明をしているのだが、メネムに対するカフィエロの敗北を説明する際にもっと活用されてもよかったのではあるまいか。

IV 若干の結語

以上ごく大雑把に概観したように、本書は「政党の制度化」という概念を軸にペロニスタ党の歩みを克明に分析しており、いわば政治学の概念を適用して現代史に肉薄したものといえよう。膨大な資料に目を通して実証的に事実を分析していく手法は手堅く、その努力には敬意を表したいと思う。また、1966年のクーデターをはじめ、いくつかの事件につ

いて興味深い解釈を提示している点も重要な貢献といえよう。さらに制度論研究が活発化するなかで、政党システムではなく、特定の政党に絞った制度論としての先駆的意義も大きいであろう。ただし、全体として見た場合に次のような疑問を感じたことも事実である。

そのひとつは、「政党の制度化」という概念に関わることだが、この枠組が、選挙に強いとはいえ、議会主義との適応性を欠くというペロニスタ党の特色を照射する上で有効であることはすでに触れた。しかしながら、ペロニスタ党における制度化の遅れが今日のアルゼンチンが抱える民主主義の諸問題（腐敗、汚職など）にどれだけ関わるかは判定の難しい問題であろう。著者の言うようなペロニスタ党の制度化がたとえ実現したとしても、腐敗や汚職などは簡単にはなくならないであろうし、本書ではペロニスタ党の制度化と民主主義との関連を誇大視しているとの印象をぬぐえなかった。

さらに、政治的事象を説明する要因としてリーダーの合理的選択を重視し、伝統や文化の制約をできる限り排除して分析していこうとする姿勢は、議論を精緻化する上では重要なことかもしれないが、場合によっては、たとえば、メネムとカフィエロの抗争に関して触れたように、もっと文化的側面を重視することも必要なのではあるまいか。

なお、ここでは政党の制度化に議論を絞ったため、その多くを語り得なかったが、本書では労働運動についても詳細な研究がなされている。それは、すでに触れたバンドールの例が示しているように、労働運動指導者の動向がペロニスタ党の制度化に深く関わるからだが、評者が一驚を禁じ得なかったのは、対立する諸労働組織の行動を説明する際に、随所で現実主義的国際政治学者として著名なケネス・ウォルツ (Kenneth Waltz) の勢力均衡論を援用していることである。この方法は、アルゼンチンの労働運動の分析枠組としてきわめて斬新で興味深い切り口かと思われるが、ただし、ウォルツが国内政治を捨象して外交を捉えようとするのと同様に、この方法では下部労働者の役割が全く無視される危険があるようにも思われた。確かに労働組織における下部とリ

ーダーとの関係は実証が難しいことは、評者も承知しているが、労働運動の分析においてこの関係をはじめから分析の枠外に置くような枠組は果たして妥当なのであろうか。

こうした疑問を感じたとはいえ、本書は理論的にも手堅く、実証面でも周到であり、評者にとっては、アルゼンチンの現代史に関して非常に読み応えのある書物だったことを申し添えておきたい。

(注1) ラテンアメリカにおける政党システムに関する最近の代表的研究としては、Scott Mainwaring and Timothy R. Scully, *Building Democratic Institutions: Party Systems in Latin America* (Stanford: Stanford University Press, 1995) などがある。なお、同書のアルゼンチンの部分を本書の著者が担当している。

(注2) 合理的選択理論とラテンアメリカ研究との関係については、David Collier and Deborah L. Norden, "Strategic Choice Models of Political Changes

in Latin America," *Comparative Politics*, vol. 24, no. 2, January 1992, を参照。

(注3) 冷戦終結と合理的選択理論との関係については、大雑把ながらチャルマーズ・ジョンソン; E・B・キーン「もっと日本を知的に捉えようではないか」(『THIS IS 読売』1994年10月号) などがある。

(注4) James William McGuire, "Peronism without Perón: Unions in Argentine Politics, 1955-1966," Ph. D. diss., California University, 1989.

(注5) この点については、拙著『ペロニズム、権威主義と従属——ラテンアメリカの政治外交研究——』有信堂 1987年 第7章を参照されたい。

(注6) 拙稿「ペロンとペロニズム再論」(『歴史学研究』第690号 1996年10月)。

(神戸大学大学院国際協力研究科教授)

〔付記〕 なお、脱稿後、Charles H. Blake による本書の書評が *Journal of Interamerican Studies and World Affairs*, vol. 40, no. 3, Fall 1998 に掲載された。